

TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局：TBS	番組名：報道特集	放送日：2018年3月24日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、日比麻音子 竹内明(オウムの取材)		
検証テーマ：南北朝鮮関係、自民党の会合、海上保安大学校卒業式と安倍総理 北朝鮮の要人、HPV ワクチン、【特集】政と官のあるべき姿		
報道トピック一覧 <ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカの銃規制</li> <li>・福岡空港、旅客機パンクで78便欠航</li> <li>・南北朝鮮関係</li> <li>・日本女子が11年ぶりにW表彰台(スポーツ報道)</li> <li>・東京で桜満開、観測史上三番目の早さ</li> <li>・熊本城の桜の名所、期間限定で開放</li> <li>・SL 山口号、今シーズンの運行が開始</li> <li>・安倍首相、自民党の会合で文書改竄問題に「全容解明」強調</li> <li>・海上保安大学校卒業式、安倍総理が出席</li> <li>・北朝鮮の要人、動き慌ただしく</li> <li>・フランス、立て籠もり事件で治安部隊の手助けをした警察官が死亡</li> <li>・埼玉県、警察官の男を長女への暴行の容疑で逮捕</li> <li>・HPV ワクチン、各国の母親が副反応を訴える</li> <li>・【特集】政と官のあるべき姿</li> <li>・【特集】サリン事件、刑執行の行方</li> <li>・スポーツ報道</li> <li>・</li> <li>・</li> <li>・</li> </ul>		
放送法第4条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨 <ul style="list-style-type: none"> <li>・南北朝鮮関係：結論→特に問題なし                      南北は今月29日に閣僚級の会談を行うことで合意したこと、会談は板門店の統一閣で開かれる予定で北朝鮮側から祖国平和統一委員会のリ・ソングォン委員長らが出席するとのことが報じられた。また、アメリカの北朝鮮分析サイト38ノースは北朝鮮、プンゲリの核実験での作業が沈静化したとする衛星写真を公開し、今月17日撮影の写真では行動から排出される水の量や作業員の数が減っていることから、南北や米朝の首脳会談を前に重要な変化だと分析していることも併せて伝えられた。このトピックについてあてられた時間は60秒で、放送法第四条の観点からは特に問題となる箇所はなかった。</li> <li>・自民党の会合：結論→特に問題なし                      安倍総理は自民党の党員らが参加する会合で森友学園への国有地売却に関する財務省の文書改竄問題について</li> </ul>		

謝罪し全容解明に全力で取り組む考えを強調したこと、党内では財務省の文書改竄問題の原因究明を優先するよう求める意見が広がりを見せていることから改憲論議は今後難航することが予想されていることが伝えられた。また、安倍総理の「国民の皆様の行政に対する信頼を揺るがす事態となっていることに対して改めてお詫びを申し上げたい。なんでこんな事が起こったのか、全容を解明し、そして二度とこういうことが起こらないようにしていくことで、その責任を果たしていく。」というコメントが取り上げられていた。このトピックについてあてられた時間は 69 秒で、放送法第四条の観点からは特に問題となる箇所はなかった。

・海上保安大学校卒業式と安倍総理：結論→特に問題なし

安倍総理は海上保安大学校の卒業式に出席し沖縄県の尖閣諸島を巡る情勢などに触れ日本の海域を取り巻く環境が厳しくなっていると指摘し法の支配に則った自由で平和な海を後世に引き継いでほしいと呼びかけたこと、現職総理の卒業式への出席は 2006 年の小泉総理以来 12 年ぶりであること、この後安倍総理は江田島の海上自衛隊幹部候補生学校を視察したことが伝えられた。また、海上保安大学校卒業式での安倍総理の「現在、我が国の海域を取り巻く環境は海上保安庁の歴史で類を見ない厳しさを見せています。」というコメントが取り上げられていた。このトピックについてあてられた時間は 51 秒で、放送法第四条の観点からは特に問題となる箇所はなかった。

・北朝鮮の動き：結論→特に問題なし

北朝鮮で長年外国との対外交渉に携わってきたリ・ジョンヒョク祖国統一研究院院長ら代表団は 23 日に国際会議出席のためスイス、ジュネーブに到着したこと、一方でフィンランドでの非公式会合に出席していた北朝鮮のチェ・ガンイル北米局副局長は北京軽油で帰国の途についたことが報じられた。このトピックについてあてられた時間は 33 秒で、放送法第四条の観点からは特に問題となる箇所はなかった。

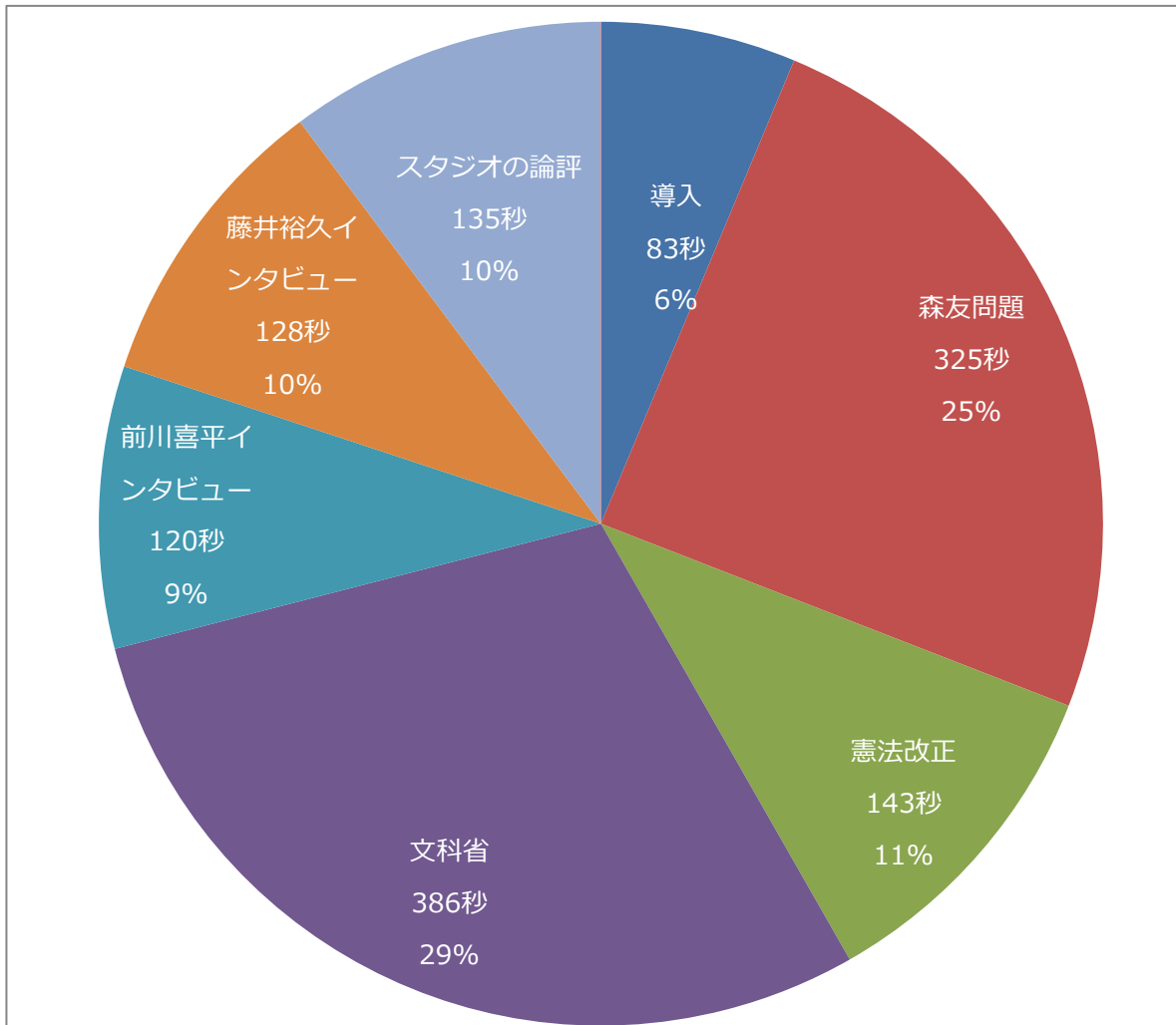
・HPV ワクチン：結論→特に問題なし

HPV ワクチンいわゆる子宮頸がんワクチンを巡ってイギリスなど世界各国から集まった母親らが都内で開かれたシンポジウムで副反応の被害を訴えたこと、シンポジウムは薬害防止を訴える市民団体が主催したものであること、各国からの副作用の症状について慢性的な痛み歩けないなどの運動障害・神経障害が多いという報告と治療を求めているのに対し心の病とされたり反ワクチンとレッテルを貼られるとの訴えがなされたことが報じられた。また、イギリスからの参加者の「国のプログラムで炉のワクチンよりも多い有害事象が報告されています。」というコメントやスペインからの参加者の「(医者などが)心の問題だ、心理的な問題だと言いつづけた。何千人もの少女たちが有害事象に苦しみ保険当局はなんら手を差し伸べていない。医者もそうです、救済してくれていない。」というコメントが取り上げられた。また、子宮頸がんワクチンの副反応を巡っては日本産科婦人科学会が摂取との因果関係も証明されていないなどとしている他、WHO の委員会がリスクがあったとしてもとても小さく、効果のほうが高いとする声明を出していて、日本では厚労省の専門部会で積極的な勧奨を再開すべきか議論が続いていることも併せて伝えられた。このトピックについてあてられた時間は 103 秒で、放送法第四条の観点からは特に問題となる箇所はなかった。

・【特集】政と官のあるべき姿：結論：極めて問題が多い

政治家と官僚の関係についての特集だった。このトピックについてあてられた時間は 1320 秒で、トピックの中は導入部分、森友学園問題について、憲法改正に向けての自民党内の動き、文科省について、文科省について

の前川喜平前事務次官インタビュー、森友学園問題について藤井裕久氏インタビュー、スタジオでの論評、という7つのポイントに大別されていた。それぞれのポイントについての時間配分及び比率は以下の通りである。



導入部分では今回の「政と官」の特集で焦点が当てられているのが「森友学園問題」と「文科省」であることが紹介された他、番組全体のオープニングで金平キャスターが「前川前事務次官の授業介入問題に登場した国会議員が映画ちびまる子ちゃんの宣伝コピー友達に国境はない、に噛み付いて文科省に抗議していたそうです。いわく、国際社会とは国益を巡る戦いの場であり、云々。呆れてものも言えません。政と官を巡るいびつな関係、特集でもお伝えします。」とコメントしていた。

森友問題では野党議員が23日に大阪拘置所で森友学園前理事長の籠池泰典被告と接見したこと、与野党は前理財局長の佐川宣寿氏の証人喚問を来週火曜日に行うことで合意したこと、デモの様子などが伝えられた。また、自民党内の声として、安倍総理の出身派閥の会長である細田博之衆院議員の「その責任は誰にあるのかということはこれから審議あるいは政府が明らかにするべきことだと思っています。」というコメントと、他の派閥の重鎮として伊吹文明衆院議員の「非常に自民党はね、やっぱり傲慢だと、そして役人に対してね、国会議員になれば何でもできるっていうふうにいるっていうのがね、自民党の支持率が今大きく下がってきた原因ですよ。」というコメントが取り上げられていた。デモの様子では金平キャスターの「官僚に対してなにか言いたいことないですか」という問いかけに対する、デモに参加していた女性の「国会議員に仕える身じゃないからとにかくもう一度民に仕えるっていうのを立ち返ってもらって」というコメントやデモに参加していた男性「丸め込まれたりしないで、ちゃんと本当のことを言ってほしい。」というコメントが取り上げられていた。また、和田政宗参院

議員が「まさかとは思いますが、太田理財局長は民主党政権時代の野田総理の秘書官を務めておられて、増税派だから、アベノミクスを潰すために、安倍政権を貶めるために、意図的に変な答弁をしているんじゃないんですか、どうですか。」と質問し、これに対して太田充理財局長が「いや、お答え申し上げます。私は公務員として、お仕えた方に一生懸命お仕えるのが仕事なんで、それをやられるといくらなんでもそんなつもりは全くありません。それはいくらなんでも、それはいくらなんでもご容赦ください。」と答えているシーンも取り上げられており、これについて与野党からの批判として立憲民主党の福山哲郎幹事長の「ある意味で財務省も被害者の一つだと考えています、非常識極まりない、本当に情けない質問だ。」というコメントや共産党の小池晃書記局長の「私も質問して本当にこう煮え湯を飲まされる事多いですよ。ただああ言われたらね、流石に霞ヶ関にみなさんもやってられないという気持ちになると思いますよ。」というコメント、麻生太郎財務相の「少なくともその主のレベルの低い質問というものはいかなものかと軽蔑はしますね。」というコメントが取り上げられていた。問題となった和田政宗議員の質問について、与野党は議事録から削除することで合意したということも併せて伝えられた。

憲法改正については憲法改正推進本部の会議において、森友問題が再燃する中で進めることに懸念を示す声もあがったものの、安倍総理の意向に沿った2項を維持し自衛隊を明記する案を軸に今後の対応を細田本部長に一任することが決まったことが報じられた。また、これに対して、木村義雄参院議員の「どちらかと言えば強引に一人一任ということになったから、まあちょっとやり方についてはこれは残念だなという感じがしてなりませんね。スケジュールがあるから、そのスケジュールに対してね、とにかくこれまでにやっとならないといけないというようなことじゃ困っちゃうからね。」というコメントや記者の「森友学園問題で政府与党に対して厳しい目が向けられている中で、自民党がこういう形で憲法の案をまとめたということが何かしら世論に対して影響を与える可能性が」という質問に石破元幹事長が「それはまだどういふうな纏め方をするかわからないから。ただ、森友の問題は森友の問題、分けて考えるべきだと思うけれども、自民党内における意見の取りまとめ方の問題はどうかんだろうね、という問題は憲法に限らずいろんな問題で国民の方々が思っているんだと思いますね。」と答えている様子も取り上げられていた。

文科省については、前川喜平氏を講師として招いた中学校に質問状を送った問題について「文科省による教育現場への介入」と位置づけた上で、この文科省の対応に自民党で文部科学部会の部会長を務める赤池誠章参院議員と部会長代理を務める池田佳隆衆院議員が関与していたことが報じられるとともに、林芳正文科相「このような事実関係の確認を行うにあたっては教育現場に置いて誤解が生じないように十分留意をすべきことは当然でありまして、そのような観点からは今回の書面についてはやや誤解を招きかねない面もあった。」というコメントと併せて、一連の問題について文科省はあくまで文科省の判断に基づいて行ったものだと説明していることが伝えられると共に、文部科学省職員の声として匿名で「どう見たって役人の文章じゃない。」「赤池さんの問い合わせには特段気を配るように言われている。部会長だから通したい法案の決裁券を握られていてなるべく早く対応するようにと言われている。」というものが取り上げられていた。また、池田佳隆衆院議員への記者の質問シーン、赤池誠章参院議員への記者の質問シーンも取り上げられていた。池田佳隆衆院議員に対する記者の質問シーンは以下に朱記したものがVTRで取り上げられていた。

ナレーション「政治による教育への不当介入ではないかと疑問視する声も強まる中、渦中の池田議員が一昨日公の場で姿を表した。

池田佳隆(自民党文部部会長代理)「送付された質問状についてであります、感想を求められましたので、2点感想を述べさせていただきます。それが全てでございます、以上であります。

記者「質問に答えていただけますか

ナレーション「記者からの質問に一切答えることなく立ち去った。」

また、赤池誠章参院議員への記者の質問シーンは以下に朱記したものが VTR で取り上げられていた。

ナレーション「一連の問題について赤池議員は日々行っている事実確認で圧力には当たらないと強調する。

赤池誠章(自民党文科部会長「あたかも、自民党の文部科学部会がですね、組織的に文部科学省に求めたかのような雰囲気がありますがね、事実は違います、私は質問書の作成には関わっておりません。事後報告でこのような詳細な質問状をあとから見たということですからすぐさま高橋初中局長にこれはちょっとやりすぎたということで私も懸念を伝えさせていただいた。」

ナレーション「赤池議員が藤原官房長に送ったメールが発端になったのではないかと問われると。」

記者「赤池さんは文科相に対していろいろ問い合わせをする、これは全く圧力には当たらないというお話なんです、例えばその言うときの口調であったりだとか、言い方だったり連絡の頻度とかそういうのも含めてそういう受け取めなんですか。」

赤池誠章「まあこれは相手のある話ですから、文部科学省自体がね、圧力だ、藤原官房長が赤池部会長からショートメールをもらって圧力だとおっしゃるんじゃ愛とは違うけれど結果はそうなったんだからこれは問題だというご指摘だと思いますが、なんか藤原官房長は圧力と TBS さんに仰ったんですか？」

記者「いや、そうではない。」

赤池誠章「であれば私と藤原官房長、文科相の見解は一緒ですからそれを圧力だとおっしゃりたいなら、圧力だという証拠を客観的根拠をお持ちして私に質問していただかないといけないなど。」

前川喜平氏へのインタビューについては文科省の問題と関連しても金平キャスターがインタビュアーとして、以下に朱記したやり取りが繰り返されていた。

ナレーション「当事者の前川前次官はこう語る。」

前川喜平「個別の学校の個別の授業の内容についてああいうふうに問い質すというああいうやり方は当該学校だけではなく日本中の学校に対して萎縮効果だとか威嚇効果とか、そういうものが事実上あったと思いますね。」

ナレ「前川氏は自身の経験から自民党の文部科学部会長や部会長代理は法案を通すための要のポストだと語る。」

前川喜平「与党として、ちゃんと了承したというプロセスを踏むためには文部科学部会の了承が必要ですから、そこから政務調査会上がっていくわけですね。」

金平茂紀「かなり力があると。」

前川喜平「蔑ろに出来ない存在であることは間違いないですね。」

金平茂紀「なるほど。」

(池田議員が質問文書の内容を事前に確認し文科相に意見を伝えた後質問文書には謝礼の金額はいくらだったか、授業の参加者について動員などが行われた事実があったかなどの文言が加えられたということがナレーションで補足説明される)

前川喜平「とんでもないことが想像しているんだろうなと言う気がしますね。動員って一体なんなのか、秘密結社かなにかあるようななんかわけのわからないことを想像しておられる人がいるんじゃないかなと思いますけれども。」

(前述の赤池誠章議員への記者の質問シーン)

金平茂紀「赤池氏なんかは事実確認をただただ、と事実確認は国会議員の仕事で、それを圧力と言われたら我々の仕事をできなくなりますよ、みたいなことを言っているんですけどこれはどうでしょう。」

前川喜平「自分たち自身が不当な支配になりうる存在なんだ、と言うことを認識しなきゃいけないですよ。国民の代表だから、選挙で選ばれたから、あるいは多数決で決めたから、ということで土足で教育の内容に入って

いっていいかって、それは出来ないんだ、と。やはりね、政治と教育の関係はどうあるべきかという基本的な認識が欠けていると思います。」

藤井裕久氏へのインタビューでは膳場キャスターがインタビュアーを務め、以下に朱記したやり取りが VTR で取り上げられていた。

藤井裕久(旧大蔵官僚・元財務相「怒ってるな、これ相当怒ってるな。」

ナレーション「旧大蔵官僚で細川政権などで大蔵大臣を歴任した藤井裕久氏、現在の生徒間の関係に警鐘を鳴らす。」

藤井裕久「役人はですね、与党のシンクタンクであるということはいいいんだよ、と。それが政局までいったときには一歩引け、という立場なんです、私は。」

ナレーション「佐藤栄作政権時代、竹下登官房長官の秘書官を務めていた藤井氏。」

藤井裕久「竹下さんはね、佐藤潰しを裏でやってたわけですよ、ね。そういう場があるときにはちゃんとね、君もう帰りなさい、これは政治の世界なんですから君は帰りなさい、明確に言っておられました。そして私もそのまま帰りました。これがね、政治家と役人の立場ってのかな、じゃないかなと思いますね。」

膳場貴子「官僚たち、公務員たちが政治に巻き込まれてしまったのはなんでだとお考えですか。」

藤井裕久「公務員が一強に対して恐れをなしている。誰も言わなくなったから、アレがみんな正しいんだというムードが出来つつあるわけでしょ、それが怖いんです。役人は公明正大であれ、と。それだけは背景に持っている、そしたらやっぱりね、お前石頭だとかね、頑固だなんて言われましたよ、石頭でいいんです。」

VTR を承けてスタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り返し広げられていた。

膳場貴子「旧大蔵官僚とそして政治家の両方を経験した藤井さんがね、大平正芳元総理に言われて大事にしてきた言葉としまして一極集中の同心円だと社会は悪くなる複数の核を持つ楕円形であることが社会を良くするとおっしゃっていました。そう言われてみますと今起きている政治家と役人の歪んだ関係というのは権力の一極集中が引き起こした結果だと言えるような気がしますよね。」

日下部正樹「その権力の一極集中ですけれども、私、先週から今週にかけてですね、全人代の取材のために中国に行ったんですけれども、この森友問題が中国のメディアでも予想以上に大きく報じられていましたね。この森友問題が中国語でですね、地価門、ですね、地価は地価ですね。門というのは英語のゲートというのから来るのですね。様々な疑惑の中でも中国でこの門、ゲートという言葉がつくとこれはトップニュースなんだ、そうです。よく考えますとですね、習近平主席は全人代を通じてですね、究極の一極集中、究極のお友達政治体制を構築したわけでしょ、そうしたなかでもしかするとネットなんかを通じて自らに降り掛かってくるようなこういったニュースをなぜここまで大きく伝えるのか、私にはちょっと不思議でしたね。」

金平茂紀「あの、前川喜平さんの言葉を一つだけ補っておきますと、政治家と官僚の間には本当は一種の緊張関係ってのがなきゃだめなんだ、と。権力を持っている政治勢力と中立であるべき行政って境目がなくなってくっついちゃっているんじゃないかって仰っていましたね。あの、和田議員の酷い質問に対して太田理財局長がいくらなんでも幾ら何でもというふうに感情をあらわにしましてけれども、あの答えでもよく聞くと公務員としてお仕えた方には一生懸命お仕えするのが仕事、って言ってましたですよ、でも公務員が仕えるのは国民全体であって、時の政権ではない。なんだか今ね、政と官に対する国民の信頼が総崩れになっているような印象さえしますよね。その意味では来週の佐川前理財局長の国会証言とっても重要だと思いますね。」

冒頭の金平キャスターの「前川前事務次官の授業介入問題に登場した国会議員が映画ちびまる子ちゃんの宣伝コピー友達に国境はない、に嘔み付いて文科省に抗議していたそうです。いわく、国際社会とは国益を巡る戦いの場であり、云々。呆れてものも言えません。政と官を巡るいびつな関係、特集でもお伝えします。」という発言

についてであるが、ちびまる子ちゃんの映画についてこの発言以外では一切触れられていなかった。ちなみにこの映画は文科省と東映のタイアップによるものであるという事情や、文科省に抗議した国会議員の言い分についても全く触れられていない非常に一方的なスタジオでの言い切りであった。

森友学園や憲法改正を巡って取り上げられた自民党議員の声は細田博之衆院議員、伊吹文明衆院議員、木村義雄参院議員、石破茂元幹事長の四名であったが、この中で派閥について言及されたのは「安倍総理の出身派閥の会長」である細田博之衆院議員と「他の派閥の重鎮」である伊吹文明衆院議員の二名だった。派閥にフォーカスを充てるのであれば、やはりどの派閥に所属しているのかあるいは無所属なのかというのは基本的にどの議員についても言及しておかなければフェアな報道であるとは言えないだろう。政治的な公平を期するためにはある議員の所属派閥には言及して他の議員の所属派閥には言及しないあるいは具体的な派閥名をぼかすというのは好ましくないだろう。

自民党の池田佳隆文科部会長代理が記者に対応するシーンについては池田佳隆衆院議員「送付された質問状についてであります、感想を求められましたので、2点感想を述べさせていただきました。それが全てでございます、以上であります。」とコメントしていたが、「2点の感想」がどういったものであるかは触れられておらず、ナレーションは「記者からの質問に一切答えることなく立ち去った。」としていたが、記者からどういう質問がなされたのかも触れられていなかった。

政治と教育については、インタビューの対象は前川喜平氏一人であったが、そもそも前川喜平氏はOBまで巻き込んだ組織的な天下り斡旋の責任をとって退官した人物であり、その組織的な天下りの背景には文科省が大学など学校に対して持っている許認可権や予算配分と言った強力な権力があつたことは記憶に新しい。今回の特集の政治と教育についてのポイントについてはそうしたことを無視して、前川喜平氏のインタビューを鵜呑みにするような番組構成であった。

以上見たように今回の報道では放送法第四条一項の二号「政治的に公平であること」に抵触しており、四号「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」という点では明らかに不十分であり、また三項の「報道は事実をまげないですること」についても重要な事実に触れないという点で極めて問題のある放送であった。

#### 最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

##### ・【特集】政と官：問題あり

金平キャスターの「なんだか今ね、政と官に対する国民の信頼が総崩れになっているような印象さえしますよね。」というスタジオでの発言であるが、政と官に対する国民の信頼が総崩れになっているというのは、今に始まったことなのか、少なくとも1990年代以降の政治改革や行政改革のモチベーションには政治不信があつたことは紛れもない事実であり、また小泉政権期の「官から民」のキャッチコピーや民主党政権下での事業仕分け・行政の無駄の削減などの背景にも官僚や行政に対する不信があつたと考えられる。こうしたことを踏まえると、今になって政と官に対する国民の信頼が総崩れになっている、というのは明らかに言い過ぎであり、元々そんなものはなかったという見方も可能である。過去の政と官に対する国民の信頼水準について検証することなく、「今総崩れになっている」などということは視聴者に対して過去を見誤らせ誤った印象を抱かせることにも繋がりがかねないので、軽々に言うべきではないだろう。

## 検証者所感

## ・【特集】 政と官

公務員は全体の奉仕者、とする意見がデモの女性やスタジオでの金平キャスターの口から出るなど、公務員についての建前論はあったが、前川氏や文科省職員の「部会長は法案を通す上で要のポスト」というたぐいの発言については批判にさらされることなく鵜呑みにする形で取り上げられていた。しかし、そもそも法律を作ることは国会の仕事であって、行政は法律に定められた諸々を執行するのだから、本来は行政の現場を担当している官僚が「法案が通るかどうか」などということは建前論で言えば心配する必要はないのだが、そうした議論はなかった。この全体の奉仕者についての建前論と、法案を通すために部会長が要という霞ヶ関の論理の両方が鵜呑みにされる形で取り上げられているのはダブルスタンダードであるように感じた。スタジオでは金平キャスターが「あの、前川喜平さんの言葉を一つだけ補っておきますと、政治家と官僚の間には本当は一種の緊張関係ってのがなきゃだめなんだ、と。権力を持っている政治勢力と中立であるべき行政って境目がなくなってくつついちゃっているんじゃないかって仰っていましたね。」と述べていたが、行政が主体的に法律を制定したり法案を通過させようとするからこそ、その境目がなくなるのではないだろうか。

前川氏の「自分たち自身が不当な支配になりうる存在なんだ、と、言うことを認識しなきゃいけないですよ。国民の代表だから、選挙で選ばれたから、あるいは多数決で決めたから、ということで土足で教育の内容に入っていっていいかって、それは出来ないんだ、と。やはりね、政治と教育の関係はどうあるべきかという基本的な認識が欠けていると思います。」という発言については、「自分たち自身が不当な支配になりうる存在なんだ、と、言うことを認識しなければいけない」のは前川氏もでは、と感じた視聴者は少なくなかったのではないだろうか。文科省の組織ぐるみの天下り斡旋の背景には文科省が学校に対して持つ許認可権や予算配分があったからであり、それこそ「不当な支配」であろう。また、「国民の代表だから、選挙で選ばれたから、あるいは多数決で決めたから、ということで土足で教育の内容に入っていっていいかって、それは出来ないんだ」ということについても、だからといって「試験に合格したから、文科省に採用されたから」という理由で教育の内容に土足で入っていいということにはならないだろうし、選挙による解任・交代がないという点に着目すれば文科省は政治家以上に謙抑的であるべき存在なのではないだろうか。